

にて懸濁した。評価は、混和状態の目視判定および濁度測定にて実施。

【結果】20～24℃、水平、水平に転がした後上下に振る(R-T1法)の組み合わせが最も混ざりやすく、適正濃度に近かった。50MIX, 70MIXは混ざりにくく、適正濃度とのずれと濁度のばらつきが大きかった。

【考察】懸濁製剤は混和回数が少ないと結晶濃度に影響する。懸濁製剤を完全に懸濁するためには、使用中は低温保管は避け、冷たくなった場合は手のひらで20～24℃に温めて混和する、混和はR-T1法を用い、1セットごとに結晶の塊の有無を確認しながら2セット以上行い、結晶の塊がなくなるまで混和することが必要であると考えられる。

8 インスリン注入器のコアリング発生に関する検証

柄沢 仁美・川崎 恵美・朝倉 俊成
影山 美穂・阿部 学・齋藤 幹央
影向 範昭

新潟薬科大学薬学部臨床薬学研究室

【目的】ナノパスニードル(以下、MT33G)の針の後端は他のJIS A型注射針に比べ2～4G分太くなっている。そこで、他の注射針とコアリング発生状況において差がないかどうか検証する目的でコアリング試験を行った。

【対象・方法】MT33G及びBDマイクロファイブプラス31G×5mm Thin Wall(以下、BD31G)と2種の注入器との4通りの組み合わせにおいて、注入器への針の装着と5単位の排出を行う操作を30本の針で繰り返した。30回分の排出液とカートリッジ残液をろ過し、フィルター上に残留したゴム片の数を顕微鏡下で計測した。

【結果】どちらの注入器においてもBD31Gとの組み合わせの方が大量のゴム片を生じるケースが多かった。

【考察】MT33Gの針後端に施されたベント加工が太さの欠点をカバーし、BD31Gよりもコアリング発生状況で優位性をもたらしている可能性があ

ると考える。

9 インスリン非投与肥満2型糖尿病患者における血糖自己測定(SMBG)を用いた栄養教育が血糖コントロールに与える影響

長谷川美代・佐々木英夫***
小林 昌子・石月公美子・石川 裕子*
佐藤 卓**・松林 泰弘***
五十嵐智雄***・原 正雄***

新潟医療センター栄養科
同 看護部*
同 検査科**
同 糖尿病センター***

10 DPP-IV阻害薬(シタグリプチン)の臨床効果

高橋菜々子・濱崎真沙子・本間 悠子
齊藤 龍弥・八幡 和明*

厚生連長岡中央総合病院薬剤科
同 内科*

【目的】2型糖尿病患者に選択的DPP-IV阻害薬を使用し、使用6ヵ月までの臨床効果について検討した。

【調査期間】2010年3月～12月

【対象患者】24名(男性14名 女性10名)

【年齢】44～83歳(平均:63.1±10.4歳)

【罹病期間】3～30年

【結果】DPP-IV阻害薬投与によりHbA1c(JDS値)は平均で開始前8.2%,1ヵ月後7.6%,2ヵ月後7.2%,3ヵ月後6.8%,6ヵ月後6.9%と改善傾向を示した。HbA1c別にみると高い人でより改善がみられ、罹病期間別には改善傾向にあまり差がみられなかった。DPP-IV阻害薬における副作用はほとんどみられなかった。DPP-IV阻害薬開始後、併用薬では多くの症例でSU薬が減量されていた。体重にはほとんど変化がみられなかった。

【まとめ】DPP-IV阻害薬投与により想像以上にHbA1cが改善するという印象をもった。早期にHbA1cが低下し一旦改善が得られたものの